

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06066

研究課題名(和文)アーネスト・ヘミングウェイの1920年代初期短編諸作品における生成原理の研究

研究課題名(英文)A Study of Donnee in Ernest Hemingway's Early Short Stories of the 1920s

研究代表者

河田 英介(KAWADA, Eisuke)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：10756266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：当研究は、米国作家アーネスト・ヘミングウェイの1920年代初期における六短編作品に対する精読と草稿調査を通して、これまで「冰山理論」に回収されてしまっていた、様々な動態を帯びる修辞技法の露れを捉え、そのありようを分節化するものである。

調査・解明の結果、作家が唱える「冰山理論」という書法は省略的書法を通じた隠蔽的修辞効果を目指すのみならず、転倒性、可謬性、撞着性、さらにアポリア等を創出する両義的修辞効果をも目指していることが判明した。

研究成果の概要(英文)：By conducting close reading and manuscript examination on Ernest Hemingway's short stories of early 1920s, this study articulates the hidden characteristics of Hemingway's writing theory of omission---"Principle of Iceberg." By way of examining in detail the rhetorical stylizations embedded in the following six works, such as 1. "Light of the World," 2. "The Sea Change," 3. "Cat in the Rain," 4. "A Simple Enquiry," 5. "In Another Country," 6. "Hills Like White Elephants," this research argues that such writing technique aims to generate effects of not only concealment, but also ambiguity that constitutes subversion, fallibility, oxymoron, and aporia in literary space.

研究分野：英米圏文学

キーワード：英語・英米圏文学 アメリカ文学 修辞学 詩学 文芸思想 ヘミングウェイ ニュー・クリティシズム 脱構築

1. 研究開始当初の背景

アーネスト・ヘミングウェイ(1899~1961)の学術的研究は1950年代のC. ベーカーとP. ヤングの研究に始まった。しかし現在まで、純粋に作家の書法や小説自体のメカニズムを解明しようとする潮流は厳密に見当たらない。ベーカーは初となる伝記をまとめ、一方ヤングは、救急車の運転手として第一次世界大戦で被弾したヘミングウェイの文学に「戦傷」(“wound theory”)という主題を見出した。この伝記的史実を作品に重ねて読む潮流は60・70年代のヘミングウェイ研究第一世代に引き継がれ、作家ヘミングウェイ自身と作品主人公達はほぼ一致するものと考えられるようになった。例えばJ. フローラはヘミングウェイ自身と初期の短編に登場する少年ニック・アダムズとを重ね、「ニックはヘミングウェイの生き写し」だとさ述べた。同時期のA. ウォルドホーンやS. ドナルドソンも同様に、作品内で決して語られることのない水面下部位に対して作家の戦傷を読み、結果として作家の書法における自伝的特性を強調することとなった。

しかし70年代の最後に出版された革命的な *Hemingway's First War* (1978)においてM. レノルズは、ヘミングウェイの *A Farewell to Arms* (1929)の最も重要な場面とされる第三部の「カポレットの退却」を緻密に調査し、それまでの多くの研究者が盲目的に信じてきたその自伝的特性を否定した。半世紀の間、読み手は「カポレットの退却」場面が作りだす迫力にすっかり圧倒され、それが間違いなくヘミングウェイ自身の体験そのものであると考えていた。しかしその調査が示すところは、ヘミングウェイがカポレットという場所に訪れたことも、さらに雨の中のオーストリア軍に追われて退却するイタリア軍を実際には見てさえいなかったという事実だった。ヘミングウェイは実のところ地図や軍の記録を手にも、全くの想像から執筆していたのである。この研究によって当然視されてきた作家の書法の自伝的特性及びヘミングウェイ自身がこれまで演出してきた戦傷を負った作家としてのペルソナが揺らぎ疑義が生じた。つまり、当研究の最大関心事である「冰山理論」という省略的書法は、虚構を創りだし、読み手の想像世界の中に真実と呼ぶべきリアリティを構築してしまうという性質をもつものと理解できる。

さて、ヘミングウェイの短編諸作品の研究で考えてみると、現在は未だ日米を中心に、30年前にレノルズが実践してみせた新歴史主義的アプ

ローチが未だ主流であり、また唯一といっても過言ではない。このアプローチとは即ち歴史の中に作家を置き直し、その作家と歴史的史実との関係を明らかにしてテキストを読む方法である。この研究方法が有効なのは、テキスト中に饅められた様々な余白の中に、作家の生きた歴史的コンテクストを見出し、小説に対するコンテクスチュアルな解釈を構築できるからである。実際にこのアプローチによって多くのヘミングウェイ短編小説中の「冰山理論」で隠された余白部分の謎の多くが急速に解明されつつある。

近年、D. モデルモグとS. デル・ギッソによる *Hemingway in Context* (2013)が出版され、そこで提示される方法論が定着していく中で、世界のヘミングウェイ研究の現代的潮流は、作家が生きた歴史環境の精密な検証を通じて「冰山理論」の水面下に隠べいされた部位を特定することとなっている。そしてそれこそが小説を忠実に読むことを可能にする唯一のアプローチであるという公算で展開している。実際、日本の『ヘミングウェイ研究』誌も米国の *The Hemingway Review* もその九割近くの論文が新歴史主義的アプローチを採るものである。

こうしてヘミングウェイ研究が始まってからの約60年、最も稀有とされる研究手法はヘミングウェイの書法と小説自体を、伝記や歴史から切り離し、「小説」としてのありのままのありようを精査するアプローチである。これは小説を一つの閉じられた芸術空間として捉え、その小説全体及び修辞や文体の振る舞いを分析することで小説の仕組みを解明し、最終的に小説そのものを説明しようとする小説論的研究である。これまでにヘミングウェイ諸作品を美術・芸術という切り口で読み解くアプローチは存在したが(e.g., E.S. ワッツ)、それはあくまでもこれまでの自伝的性質や歴史の代わりに美術作品を参照するものであり、基本的には小説外のコンテクストを根拠に、小説内コンテクストを特定するものだった。つまりこれまでヘミングウェイ研究の多くは、作品の外に存在するもの(例えばジェンダー、セクシュアリティ、人種、等に)に依拠して小説内世界のコンテクストを特定してきた経緯がある。当研究はこうした学術的背景の下に、ヘミングウェイ小説の正鵠を把握するための方法論を模索し、その独自の切り口から小説を読み直す研究を行った。

2. 研究の目的

米国作家アーネスト・ヘミングウェイの1920年代の初期短編作品における多様な書法は、作家自身が「氷山理論」と呼ぶ、水面下に対象物の八分の七を隠してしまう省略的書法(一般にハード・ボイルドと呼ばれる書法)に回収可能なものとして認識されてきた。しかしそれが故に作品毎に多様・特異な振舞いをする修辞効果を創り出す書法が研究対象となることは稀だった。そのため本研究は、ヘミングウェイ文学の核心とされる「氷山理論」に新たな切込みを加えるべく、その理論が創成された1920年代の初期短編の最重要な作品の幾つかを取り上げ、詩学的・修辞学的及び文献学的な視座から、これまで隠蔽され続けてきた多様且つ特異な諸書法を精査し、そこから現出するロジックとレトリックの分節化を通じて、それらの思考性の前提となっている生成原理の全容の解明を眼目とした。

本研究は従来の日・米国の主流なヘミングウェイ研究とは異なり、作家そのものの書法を詩的芸術として観察し、作品内に根拠を見いだしながらそれが構築する意味や読み手の読解可能性の中で作りだされる解釈の可能性、またはその書法が織りなす言語が作りだす解釈の決定不可能性のメカニズムを捉えるものである。これはヘミングウェイの短編作品における様々な書法が創り出す修辞が構築するレトリックとロジックの研究そのものであり、さらにその思考の前提にある生成原理の性質を明らかにすることでもある。このようにして、これまでほぼ精査されることのなかったヘミングウェイ文学の核心的書法とも言うべき「氷山理論」に修辞学的及び詩学的視座から新たな切込みを加え、ヘミングウェイ作品の読み・解釈可能性を広げることを目的とする。この研究を継続・発展させることは、新たなヘミングウェイ研究の地平を開くことを可能にするだろう。

3. 研究の方法

当研究はヘミングウェイ作品の中で営む「氷山理論」という書法の新たな性質を解明することが目標であるため、ともすれば時代錯誤的な新批評的研究手法を採る。この方法論は「氷山理論」が作りだす空白世界に対して、作品内にその根拠を求めるものであり、ある意味で作者の芸術性——小説のありのままの姿——に真摯に眼差しを向ける方法論の一つである(しかし、本研究はニュー・クリティシズムが実践する象徴読解は行わず、作家の用いる文体・文法を一つの絶対基

軸と位置付けて作品を読解する)。小説を取って一つの閉じられた世界として捉えることで、その中で作家が純粋に、どのような芸術を創作したのか(あるいは作家自身でさえ意図していない創作性)を調査しうるはずである。本研究はこの方法論を通して、これまで「氷山理論」としてまとめて回収されてきてしまった多様に振る舞う書法を前景化させ、特化してその芸術性を精査し、作家がもつ書法そのものの芸術性の新たな性質を浮彫にする。

平成27年度は第一に、研究射程である六つの短編作品の基礎的な第一次文献調査を進めた。英語文法及び作者文法的な視点から、各々の作品を特徴付けている重要部位に着目し、その語法の入念な観察し意味の流体作用を究明した。第二に、修辞学的・詩学的観点から、その形式と小説内容の関係性の解析調査を進めた。第三に、両作品の調査から現出してきた第一次文献レベルの生成原理の輪郭を素描するとともに、作家の省略的書法である「氷山理論」の根本原理を確認するために、多くの二次文献に当たった。その後、当調査はこれまで言及されることのなかった「氷山理論」の「転倒的性質」及び「可謬的性質」という新たな性質を見いだした。そしてそれらの新たな性質を仮説付けるために、論文の執筆を始め、第四に、当研究の仮説の信憑性を調査するために、米国マサチューセッツ州ボストンにあるJFKライブラリーのヘミングウェイ・ルームに赴き、研究射程とする六つの短編作品の初期草稿および編集・校正草稿、ゲラのマニュスクリプトの調査を行った。作家どのように原稿を執筆・編集・校正したのか、さらにどのような方向性をもって自らのレトリックを精錬させ、作品そのものの芸術性・審美性を高めていったのか、その実践を見極める作業を通じて、(4.研究成果、参照)平成27年度に論じた三作品に対する仮説を裏付ける論文を完成させ投稿した。

平成28年度においては、第一に、残り三作品(4.研究成果、参照)の第一次文献調査を再び進め、第二に、それらの特徴が全体として構築する修辞を同定し、それらがどのような作用をもたらしながら小説内容を作り上げているのかの解析調査を行った。第三に、それら小説のメカニズムを一つの土台として、作家ヘミングウェイの省略的書法である「氷山理論」がどのようにそれと対応しているのかを調査し、その書法の根本原理を考察していった。以上三つの段階を通して本年度の研究においては、27年度に立証した「氷

山理論」の「転倒的性質」と「可謬的性質」以外に、新たに「撞着語法的性質」、「比喩の積極的創出」及び「両義的性質」という仮説を28年度学暦中に投稿・掲載された三つの査読論文において立証した。

4.研究成果

ヘミングウェイの初期短編作品をあらためて芸術作品として精読し、その「冰山理論」という手法の本質を究明する試みは、一見時代錯誤的に映るが、文学作品を読む上で常に必要とされてきながらも、常に最も軽視されてきた読み方と言える。さらに1980年代以降の政治的問題を深く顧慮する読解方法によって、テキストを修辞・詩学的に精読する研究姿勢はますます軽視されつつある。それ故、当課題においては徹底した精読を基にして、作品の調査・分析・解明・考察を行った。この成果は16ヶ月間で6本の研究論文(内、二本の英語論文)と2本の学会発表(内、一本は国際ヘミングウェイ学会における英語発表)に結実している。

第一の成果は、研究論文「小説空間の真実性／可謬性——アーネスト・ヘミングウェイ "The Light of the World" における冰山理論の効果と意義」『論叢 現代語・現代文化』がある。この作品をめぐる言説はこれまで、この作品が帯びる宗教的磁場、古典との関係性、歴史的眞実、構造主義的な読解、といった作品から見れば外在的な根拠をもって、その小説的価値を確認し、それが帯びる眞実性とその文学性を測定してきた。それ故当論文においては、逆に、ストーリーとプロットに限定した焦点をもって、修辞・詩学的な眼差しから読み直しを実践した。そこにおいては読者反応批評的視座から、なぜ娼婦のアリスとペロクサイドの口論を垣間見るニックが登場するこの物語が、外在的根拠をもって読まれることとなったのかの読み手側の根拠を、ストーリーの精読を通じて明らかにした。そして、その根拠こそが本作品の本質——つまり作者がこの作品で前景化した修辞であり、また何も起こりはしないこの小説の本質——であるという仮説を実証した。議論においては、この作品でいかに発揮される「見せながら隠す」「隠しながら見せる」ヘミングウェイの冰山理論のもつ撞着的表現技法こそが、このテキストが帯びる小説空間を成立させるものであり、それをもってこの小説は読み手の立つリアリティにおける「眞実機構の脆弱さ」を露呈するという

仮説立てを行った。

第二の成果は「倫理的瞬間を求めて読むこと——アーネスト・ヘミングウェイ "Cat in the Rain" の読み方／読まれ方」『筑波大学外国語教育論集』である。本論はJ.ヒリス・ミラーの *The Ethics of Reading* (1987) で提出される「読むことの倫理」の問題関心を中心的意識として、“Cat in the Rain” の読み方と解釈の仕方を考察した。この小説においては、イタリアを旅行するアメリカ人夫婦が登場する。しかしすれ違う夫婦を余所に、彼女は宿泊するホテルの亭主の深い配慮ともてなしを受ける。その時妻はその亭主を前に、“[s]omething felt very small and tight inside” という感覚に見舞われてしまう。これまで多くの言説がこの場面を性的先入観から受け止め、これを彼女の妊娠願望説として理解し、この“something” が胎児を示すと捉えてきた。しかしそれは、「女性だからこそ妊娠を欲望しているはずだ」という読み手が無意識にもつ父権的思考に由来するものでしかないと言える。文法的に言えば、その“something” における“-thing” とは、必ずしも「モノ」だけでなく、「コト」をも指示しうるはずなのだ。つまりそれは従来の「胎児」を指示するという説のみならず、夫婦のすれ違いによって意味される妻が失いかけていた「己の尊厳」をも指示しうるということである。当論文はその二重の指示可能性を通して、読み手がテキスト—妻—と向き合う際には「倫理的」と呼ぶべき何らかの「弁え」がなければ言語の露れを正確に諒解することは困難だと主張した。

第三の成果は、「書かれはしないが言われていること」が、書かれたものをつまびらかにする時——アーネスト・ヘミングウェイ “The Sea Change” における 転倒的冰山理論の修辞技法」『論叢 現代語・現代文化』である。フランスの Saint-Jean-de-Luz のバーを舞台にした男女カップルの別れ話のもつれを描く短編 “The Sea Change” は、ヘミングウェイ短編の中でも最も正当な評価をされてこなかった作品の一つである。何も起こらないままひたすらダイアログが続くこの作品は、出版当初に高評価を得た。しかし後の言説は登場人物男性 Phil が「負け犬」、「ホモセクシュアル」、「墮落」を意味するという見解でほぼ一致し、作品の記号内容が読み手に与える「否定的効果」を根拠に、この作品はこれまで過小評価されてきた。それ故、当論文ではそうした評価が、テキストのもつストーリーや隠蔽されるプロットに基づいていないことに疑義を唱え、より十

全とした再評価を提出するためにはテキストの精読に基づいた読み方と解釈が必要であると主張した。議論においては、先行研究が語る伝記批評、性倒錯性、ジェンダー・セクシュアリティ問題を吟味することで、なぜこの作品がそのように読まれるようになったのかの根拠をテキストの修辞の読解から考察した。そして結果、書き手の視点こそがそうした読み方を誘引していることを突き止め、その修辞が創出する効果こそがこのテキストがもつ最重要なレトリックであるという仮説を立証した。当論文はつまり、この小説を読むということは、それが「どのように書かれているのか」の記号表現を精読することであり、それを通じて隠ぺいされる記号内容（「何が書かれているのか」）を捉えなければ、何も読まれはしないということを主張した。

第四の成果は “A Hermeneutic Ethics to the Reading of Gender and Sexuality in Literature: The Oxymoronic Rhetorical Signification of Ernest Hemingway’s ‘A Simple Enquiry’” *Journal of Modern Language and Cultures* である。本論は米国作家アーネスト・ヘミングウェイの短編作品 “A Simple Enquiry” (1927) を取り上げ、この作品をめぐる言説を渉猟する中でこの作品がどれほど偏見をもって読まれてきたのかを確認し、その根拠を言説の中で探るとともに、精読を通じて本作品テキスト本来が創り出す物語性質を明らかにすることを目的とした。この作品は第一次大戦中のイタリアの前線基地三人の男をめぐる物語である。主人公の一等兵ピニンが少佐の部屋で妙な時間を過ごし、部屋の外で盗み聞きをする副官がにやりと怪しく笑う。時間的断絶が細かく発生するダイアログの中で、この作品は何とも訝しい雰囲気を作り出す。読む価値を殆ど見いだされることのないこの作品は、1980年代のジェンダー・セクシュアリティ研究の勃興によって「ホモセクシャル」という文脈に取り込まれ、突如としてその参照価値を見いだされた。しかし本稿はテキストの精読を通して、ホモセクシュアリティは映画的な描写効果からしか確認することが出来ないこと、そして厳密に言って語り手が伝える物語そのものとは関連がないことを実証し、「氷山理論」が示す氷山の八分の一のテキストへの真摯な眼差しの必要を唱えた。

第五の成果は、“Of Aristotelian Tragedy, Impaired Bodies, and Human Truths: A Poetical Analysis of Ernest Hemingway’s ‘In

Another Country’” *Journal of Modern Language and Cultures* である。この作品はその文学的価値を認められながらも、これまで統一＝有機的と呼びうる読解が全面的に実践されてきた訳ではない。実際、本作品の修辞的技法を評価する Sheldon Grebstein, David Lodge, Robert Lamb の修辞学一派と、よりテーマに焦点を置き読解する J. Bakker, Joseph Defalco, Julian Smith に代表されるテーマ読解一派による分離化が進んでおり、その両極を架橋するような十全とした統一読解・解釈が提出されてきたとは到底言えない状況がある。それ故本論においては、詩学的なアプローチからその修辞的技法とテーマの連絡関係を明らかにすることで、有機体としての当作品の全体的な記号表現とその記号内容が映しだしている新たなテーマを同定した。具体的には第一次大戦中のイタリアで片足が不自由となってしまった米国人の語り手と、片手が赤子のように萎んでしまったイタリア人少佐がミラノ病院でリハビリをするこの小説は、記号内容としての悲劇のみならず、その表現がもつ修辞的形式においてもアリストテレスが『詩学』で定義する「悲劇」と完全に一致するものであることを議論する。この小説がもつ一つの統一体としてのカタチは、これまで語られたこともなければその意味が探求されてこともない。それ故本論においては、本小説がもつ特異なカタチ——つまり小説の前半で語り手はストーリーとプロットの両方を提出するにもかかわらず、後半においてはストーリーのみが語られるという不自然な（困難を伴った）カタチ——は、語り手と少佐がもつ身体的障害のカタチとまさに一致するものであり、この小説全体の身体的カタチが二人の身体的困難を映しだしている点も議論した。つまり十全とした統一読解・解釈を経ることで、この小説自体の記号表現がその記号内容となっている点を明らかにした。

第六の研究成果は、「ダイアログにおける齟齬、両義性、断絶というナラティブ——アーネスト・ヘミングウェイ “Hills Like White Elephants”における修辞技法の分析」である。スペイン・サラゴサの駅舎のバーで列車を待つ若いアメリカ人カップルが抱える妊娠と中絶の問題、そして二人の将来への展望をめぐる二人の葛藤とすれ違いを痛々しく且つ滑稽に描くこの短編小説はこれまで、文体の簡潔さが創り出す余白に隠蔽される潜在的な二項対立的問い——二人は中絶を選択するのか否か、中絶した場合は別れるのか否か、しない場合は別れるのか否か、といった——テクス

トの額面からは隠蔽される様々なストーリーの可能性をめぐって多くの議論が交わされてきた。言わば、テキストの記号内容の読解のみから得られる解釈を通して、このストーリーは読まれてきたと言える。しかし当論文は、小説の九割方を占める二人のダイアログの記号内容ではなくむしろ、その記号表現(カタチ)に着目し、それを通して二人の会話がどのように「顕われ」ているのかの修辞的分析を通じて、二人のダイアログ及び身体的振舞いの間で交換されるレトリックを読み解き、二人のやりとりのカタチが何を意味しているのかを究明した。具体的に、代名詞 it や one そして不定代名詞 everything の指示対象が二人の間で暗に取って代えられていくことで、記号表現と記号内容の乖離し、表層におけるダイアログの両義的効果が入念に齟齬を映しだされる体系が構築されることを突き止めた。そしてその体系こそが、本小説の正鵠と云う断絶を表象するメカニズムとなっている点を示した。「形式が内容を、内容が形式を」体現するこの小説は、その記号表現とその記号内容の「断絶」によって「ストーリーの大円団」が宙吊りにされ、それこそが本小説の大円団そのものであると主張した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件)

① 河田英介、「ダイアログにおける齟齬、両義性、断絶というナラティブ——アーネスト・ヘミングウェイ “Hills Like White Elephants” における修辞技法の分析」、『文体論研究』、日本文体論学会、査読有、第 63 号、日本文体論学会、2017 年、pp. 13-28.

② Kawada, Eisuke. “Of Aristotelian Tragedy, Impaired Bodies, and Human Truths: A Poetical Analysis of Ernest Hemingway’s ‘In Another Country’” *Journal of Modern Language and Cultures*, University of Tsukuba, Peer-Reviewed, vol.18 (2017, Mar): 81-96.

③ Kawada, Eisuke. “A Hermeneutic Ethics to the Reading of Gender and Sexuality in Literature: The Oxymoronic Rhetorical Signification of Ernest Hemingway’s ‘A Simple Enquiry’” *Journal of Modern Language and Cultures*, University of Tsukuba, Peer-Reviewed, Vol 17 (2016, Oct): 39-54.

④ 河田英介、「書かれはしないが言われていることが、書かれたものをつまびらかにする時——アーネスト・ヘミングウェイ “The Sea Change” における 転倒的冰山理論の修辞技法」『論叢 現代語・現代文化』、筑波大学、査読有、第 16 号 2016 年、pp.29-50.

⑤ 河田英介、「倫理的瞬間を求めて読むこと——アーネスト・ヘミングウェイ “Cat in the Rain” の読み方／読まれ方」『筑波大学外国語教育論集』、筑波大学、査読有、第 38 号、2016 年、pp.45-59.

⑥ 河田英介、「小説空間の真実性／可謬性——アーネスト・ヘミングウェイ “The Light of the World” における冰山理論の効果と意義」『論叢 現代語・現代文化』、筑波大学、査読有、第 15 号、2015 年、pp.103-125.

[学会発表](計 2 件)

① Kawada, Eisuke. “The Ethics of Reading Ernest Hemingway’s *In Our Time* in the Age of Globalism.” *XVII Biennial International Ernest Hemingway Conference*. July 18th, 2016. Dominican University, Michigan, USA. (English)

② 河田英介、「アーネスト・ヘミングウェイ “Hills Like White Elephants” におけるダイアログの修辞技法」日本文体論学会、第 109 回全国大会、2016 年 6 月 26 日。於：杏林大学 東京都三鷹市、三鷹キャンパス。使用言語：日本語

[その他]

ホームページ等

<http://www.trios.tsukuba.ac.jp/researcher/000003705>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河田 英介 (KAWADA Eisuke)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号:10756266